

## 様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成21年 5月 13日現在

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2007～2008  
課題番号：19590623  
研究課題名（和文） 日本版NCATS簡易尺度の開発および臨床場面での有用性に関する研究  
研究課題名（英文） A study of the development and a test of reliability and validity of a short form of the Japanese NCATS (JNCATS)  
研究代表者  
寺本 妙子 (TERAMOTO TAEKO)  
東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・特任助教  
研究者番号：20422488

### 研究成果の概要：

本研究の目的は、乳幼児期の親子相互作用をアセスメントする尺度である日本語版 NCATS (JNCATS: Japanese Nursing Child Assessment Teaching Scale) の簡易版の開発、およびその臨床場面での有用性についての検討であった。

健康な日本人母子（約 400 件）の JNCATS データベースを利用して、因子分析および乳幼児とその家族に関する専門家への質問紙調査の結果から 31 項目から成る簡易版を作成した。 $\alpha$  係数 (KR-20) および日本語版原版 (JNCATS) 得点との相関関係の検討の結果、本簡易版の信頼性が示唆された。しかし、子どもの発達に関するアセスメント結果との相関関係の検討の結果からは、併存的妥当性を示唆する十分な根拠は得られなかった。また、問題が疑われる親子（子どもの発達、母親の教育年数の 2 変数）を検出するスクリーニング用具としての妥当性を検討した結果からも十分な根拠は得られず、本簡易版の臨床場面での利用に疑問が投げられた。

本簡易版の開発は成功とは言えないが、これは本研究の手続き上の不備を示唆するものでも、原版である NCATS や JNCATS の評価を損なうものでもない。元来、NCATS は科学的行動観察に基づくユニークなアセスメント尺度であり、その簡易版開発に困難が伴うことは予測に難くない。本研究の結果は、簡易版ではなく原版である JNCATS の使用の必要性を示唆するものと捉えられる。今後の JNCATS の臨床場面での普及促進のためには、訓練体制やコンサルテーション体制の整備といった、JNCATS ユーザー支援ネットワークの整備が必要不可欠と考えられる。

### 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：社会医学・公衆衛生学・健康科学

キーワード：母子保健，母子相互作用アセスメント尺度

## 1. 研究開始当初の背景

小児保健および母子保健の分野においては、心身ともに健康的な子育てを目指し、母親の精神的健康の促進（産後うつ予防、育児ストレス・育児不安の軽減）、良好な母子関係や愛着形成の促進、虐待の予防、子どもの発達の促進等の観点から早期母子相互作用の重要性が国内外で指摘されてきた<sup>1-3)</sup>。

これらの研究において重要となるのは、母子相互作用を測定・アセスメントする方法や用具である。現在のところ、母子相互作用アセスメント用具として最も広く普及している尺度のひとつとして、米国ワシントン大学の K. Barnard 名誉教授を中心に開発された NCATS (Nursing Child Assessment Teaching Scale)<sup>2)</sup>が挙げられる。NCATS は遊びを通じて教える場面における母子相互作用を科学的行動観察に基づいてアセスメントする尺度である。米国で標準化されたこの尺度は、看護・保健・福祉・心理・教育と領域を超えて、また、研究活動においても臨床活動においても広く使用されている。

しかし、我が国の現状では母子相互作用や親子の関係性をアセスメントできる NCATS に匹敵するような用具は見あたらない。そこで、東京医科歯科大学廣瀬たい子教授を中心に NCATS の日本語版開発が進められ、平成 20 年度には、約 400 件の日本人母子のデータベースを備えた日本語版 NCATS (JNCATS) が完成した<sup>4,5)</sup>。

今後は、JNCATS を研究と同様に臨床場面でも活発に利用することが期待される。しかしながら、JNCATS の臨床場面での利用には幾つかの問題点が予想される。まず、本尺度の使用認定を得るために要する訓練コストの高さが挙げられる。本尺度を使用する場合、講習会の参加と信頼性テストの合格を通じて使用認定を得る必要がある。これには、通常約 20 時間を要する。次に、本尺度を臨床現場（例えば、病院の小児科外来、新生児家庭訪問、乳幼児健診、育児相談、発達相談等）で使用する際の労力コストの高さが挙げられる。

1 番目の問題、すなわち、訓練コストの高さは、JNCATS が科学的行動観察に基づくことに起因する。回答に特別な訓練を要しない

自記式の質問紙調査形式のアセスメントと異なり、JNCATS によるアセスメントは使用者に親子の相互作用の観察者としての訓練を要請する。これは、観察結果に信頼性と客観性を保証するための手続きである。このような高い訓練コストを有していても、行動観察という手法には大きな利点がある。それは、実際の親子のダイナミックなやりとりを客観的に捉え得るというものであり、母親の内省や専門職者の経験的直観では捉えきれない側面を可視化する可能性が期待される。

一方、2 つ目の問題である臨床場面での使用の際の労力コストの高さは、JNCATS で設定されている項目数の多さ（養育者/親に関する 50 項目と子どもに関する 23 項目の合計 73 項目）に起因すると考えられる。

このような問題点を克服する方略のひとつとして、簡易版の開発が考えられる。より少ない項目数で原版尺度と同様のアセスメント能力を有する簡易版があれば、少なくとも、臨床場面での労力コストは軽減できる。ただし、簡易版を利用するにしても使用に関する訓練手続きの簡略化は慎重にならざるを得ない。また、開発された簡易版が臨床場面でどれ程の有用性を有するのか検討することが必要不可欠となる。

## 2. 研究の目的

以上のような経緯から、JNCATS の簡易版の開発とその臨床場面での有用性の検討を本研究の目的とした。臨床場面での有用性に関しては、スクリーニング用具としての妥当性を検討した。

## 3. 研究の方法

### (1) 母子相互作用アセスメント尺度 JNCATS

JNCATS は母子が遊びを通じて教える場面について使用認定を受けた観察者が符号化する尺度である（子どもの適用月齢は 0 から 36 ヶ月齢）。行動科学的に定義された 73 項目について該当するか否か（「はい」か「いいえ」）を判定する。「はい」であれば 1 点、「いいえ」であれば 0 点が配点される。「はい」となる項目の合計数（合計得点）が JNCATS 得点となり、母子相互作用が良好であるほど高得点となる。

JNCATS は 73 項目から構成され、母親に関する 4 つの下位尺度と子どもに関する 2 つ

の下位尺度が設定されている。母親に関する下位尺度は「子どもの Cue に対する感受性 (Sensitivity to Cues)」(11 項目), 「子どもの不快な状態に対する反応 (Response to Child's Distress)」(11 項目), 「社会情緒的発達の促進 (Social-Emotional Growth Fostering)」(11 項目), 「認知発達の促進 (Cognitive Growth Fostering)」(17 項目)の 4 つであり, 子どもに関する下位尺度は「Cue の明瞭性 (Clarity of Cues)」(10 項目), 「養育者に対する反応性 (Responsiveness to Caregiver)」(13 項目)の 2 つである。

## (2) 試作簡易版の開発

簡易版開発の予備研究として, 次の①から⑥の手順で試作簡易版の開発を試みた<sup>注1)</sup>。

① JNCATS データの収集: JNCATS データベース<sup>4)</sup>から 150 件分の JNCATS データを抽出し, 試作簡易版作成に利用した。JNCATS データベースは, 健康な日本人母子を対象に作成された。このデータベースの整備にあたっては, 研究協力は任意であり, 参加者のプライバシーを保護する等, 不利益が生じないように配慮すること, 途中で協力を拒否することが可能であること等が対象者に説明され, 研究協力の承諾書への署名を得るという倫理面への配慮がなされた。簡易版作成用に利用された 150 件の内訳は, 1~12 ヶ月齢児 48 件 (32.00%), 13~24 ヶ月齢児 51 件 (34.00%), 25~36 ヶ月齢児 51 件 (34.00%) で, 子どもの平均出生時体重は 3180.59g (±289.89), 母親の平均出産時年齢は 32.23 歳 (±4.00), 平均教育年数は 14.01 年 (±2.35) であった。

② 因子分析: 試作簡易版に採択する項目を選定する目的で, 150 件の JNCATS データに因子分析を試みた (主因子法, プロマックス回転)。73 項目のうち, 通過率 100%となる項目 (項目 12) と相関係数が 1.00 となる 2 項目のうち片方 (項目 2) を除外した。原版 JNCATS では母親側に 4 下位尺度, 子ども側に 2 下位尺度が設定されているため, 因子数は母親に関して 4, 子どもに関して 2 に固定した。因子負荷量が 0.35 以上かつ共通性が 0.16 以上になる項目を試作簡易版候補とした。分析には SPSS 11.5J for Windows を利用した。

③ 専門職者対象の質問紙調査・専門家会議: 乳幼児とその家族を対象とする専門職者で JNCATS の使用認定を受けている 5 名, および, JNCATS については未知であるが乳幼児健診を担当する専門職者 11 名を対象に自記式質問紙調査を実施した。この調査では, JNCATS の各項目の重要性についての 4 段階での評定 (「非常に重要」~「重要でない」) が要請された。また, 上記の JNCATS 認定者 5 名で専門家会議を開催し, 試作簡易版の

項目数, 削除可能な項目, 集約可能な項目, 必要不可欠である項目についての検討がおこなわれた。

④ 試作簡易版項目の決定: 上記の②と③の結果を吟味したうえ, 原版 NCATS における主要概念 (言語性, 随伴性, 情動, 感受性, 姿勢と位置, 否定的対応, 親和, 嫌悪)<sup>2, 5)</sup> が網羅されていることを確認して試作簡易版項目を決定した (母親に関して 20 項目, 子どもに関して 9 項目)。原版と同様に, 各項目に該当すれば 1 点が配点され, その合計が試作簡易版得点となる。高得点ほど良好な母子相互作用とされる。

⑤ 試作簡易版データの作成: JNCATS データベースより抽出した 75 件 (上記 150 件のうちの半分) の母子相互作用場面について, 試作簡易版 (29 項目) を用いてコーディングをおこなった。全体の約 15% (11 件) について 2 回コーディングをおこない観察者内一致率が 90%以上であることを確認した。

⑥ 試作簡易版の信頼性検討: 試作簡易版の信頼性は, 試作簡易版得点と原版 JNCATS 得点の相関係数の検討, および, 内的一貫法による方法によって検討された。内的一貫法に関しては, JNCATS は 0 か 1 かの 2 値データであるため, Kuder-Richardson の公式 20 (KR-20) を利用した。試作簡易版得点と原版得点の相関係数は  $r = .60$  ( $N = 150$ ,  $p < .001$ ) となり有意な相関関係が認められたが,  $\alpha = .57$  となり, やや低めであった。

原版得点との有意な相関関係は試作簡易版の信頼性を示唆するものであるが,  $\alpha$  の値は十分とはいえず, 試作簡易版の信頼性の根拠には不十分であった。この一因は, 試作簡易版項目の選定において, 因子分析や質問紙調査の結果のみならず, 専門家会議における意見や NCATS の概念検討が加味されたためと考えられる。また, 試作簡易版は 150 件という比較的少ないデータに因子分析を試みて作成されたが, 簡易版については, より多くのデータに基づいて因子分析を試みることを望ましい。そして, 簡易版項目の選定に際しても明確な基準を設け, 簡易版の信頼性ならびに妥当性についての検討も必要といえる。

## (3) 簡易版の開発

上記の試作簡易版開発の結果をふまえて, 次の①から④の手順で簡易版開発を試みた。

① JNCATS データの収集: 簡易版開発においても, JNCATS データベース<sup>4)</sup>を利用した。今回はデータ数を 397 件に増やした。対象者の属性を表 1 に示す。

② 因子分析: 簡易版に採択する項目を選定する目的で, JNCATS データ 397 件に因子分析を試みた (主因子法, プロマックス回転)。73 項目のうち, 通過率 100%となる 2

項目(項目2と54),および,相関係数が1.00となる2項目のうち片方(項目21)を除外した。試作簡易版と同様に,母親に関する因子数を4に,子どもに関する因子数を2に固定した。因子負荷量が0.4未満の項目を除外するというプロセスを繰り返して,簡易版項目の候補を抽出した。分析にはSPSS 15.0J for Windowsを利用した。

③ 専門職者対象の質問紙調査: 乳幼児とその家族を対象とする専門職者で, JNCATSの使用認定者を対象に自記式質問紙調査を実施した。この質問紙調査は既述の試作簡易版開発の際に実施されたものと同一である。

この調査は, JNCATSの各項目の重要性について4段階での評定を要請するものであった。「非常に重要」に3点,「重要でない」に0点を配点し,各項目の評定結果の平均値を算出した。それが全体平均プラス2SD以上となる項目を簡易版項目の候補として抽出し,全体平均マイナス2SD未満の項目を候補から除外することにした。

④ 簡易版項目の選定: 上記②と③の結果を吟味して簡易版項目を決定した。

表1 対象母子の属性

	N	平均(±SD)	%	範囲
子ども				
月齢	397	13.43 (±8.76)	-	1-36
1-11ヵ月	200	6.99 (±2.77)	50.38	1-11
12-23ヵ月	137	15.40 (±3.36)	34.51	12-23
24-36ヵ月	60	30.38 (±4.60)	15.11	24-36
出生時体重	397	3,123.67 (±354.63)	-	2,500-4,774
性(男児%)	397	-	53.15	-
出生順位(第1子%)	397	-	71.36	-
母親				
出産時年齢	397	31.21 (±4.24)	-	19-44
教育年数	354	14.29 (±1.95)	-	9-26

#### (4) 簡易版の信頼性・妥当性の検討

簡易版の信頼性と妥当性の検討は次の①から④の手順でおこなった。

① 簡易版得点の推定: 簡易版得点は,試作簡易版と同様に,「はい」となる項目の合計数で示され,母子相互作用が良好であるほど高得点となる。

試作簡易版研究において実際に試作簡易版を用いてコーディングされたデータと,原版 JNCATS データから推定された得点(試作簡易版で採用された項目得点を抽出して算出)とのあいだには有意な相関関係が認められた( $N=75, r=.71, p<.001$ )。これは,簡易版得点を原版得点から推定する手続きが有効であることを示唆する。そこで,簡易版得点を原版 JNCATS 得点から推定した値を利用して以下の分析を進めることにした。

② 簡易版の記述統計: 簡易版得点の平均値,標準偏差,10パーセンタイル値を算出した。原版(英語版) NCATS マニュアルに従い,10パーセンタイル値は12ヵ月齢以下の乳児と13ヵ月齢以上の幼児に分けて算出し,カットオフ値として利用した。

③ 簡易版の信頼性検討: 簡易版の信頼性は,試作簡易版の場合と同様に,簡易版得点と原版 JNCATS 得点の相関関係の検討,内的一貫法による方法によって検討された。

④ 簡易版の妥当性検討: 簡易版得点と子どもの発達アセスメント結果の相関関係を吟味することによって併存的妥当性について検討した。発達アセスメント結果は既述の JNCATS データベースから抽出した。発達アセスメントには, KIDS (キッズ) 乳幼児発達スケール<sup>6)</sup>,新版 K 式発達検査<sup>7)</sup>,遠城寺式乳幼児分析的発達検査<sup>8)</sup>,乳幼児精神発達診断法<sup>9)</sup>が利用された。標準的発達の目安として各尺度の(総合)発達指数(DQ)が100以上か否かで2群化し, DQ100以上を発達促進群,100未満を非促進群とした。発達促進群に0を,非促進群に1を割り振り,簡易版得点との点双列相関係数を算出した。

また,スクリーニング用具としての妥当性を検討するために,感度(sensitivity)と特異度(specificity)を算出した。感度は真陽性/(真陽性+偽陰性)で求められる。特異度は,真陰性/(偽陽性+真陰性)で求められる。感度と特異度の両方が高い尺度が優れたスクリーニング用具の条件となる<sup>10)</sup>。陽性群(ここでは,潜在的問題が懸念される群の意味で使用する)は,子どもの発達と母親の教育年数という2つの変数を利用して判定された。DQが100未満である子どもを発達面における陽性群(非促進群)と仮定し,教育年数12年以下の母親を母親属性における陽性群と仮定した。我が国において,教育年数の少なさが母子相互作用において高リスクであるという十分な根拠は報告されていないが,米国で標準化された原版 NCATS のデータベースでは少ない教育年数が高リスクであると指摘されているため<sup>2)</sup>,本研究でもこの考えに基づいて探索的に検討を試みた。母子相互作用に関しては,上記②で既述したカットオフ値未満である母子を陽性群(高リスク群)と仮定した。

## 4. 研究成果

### (1) 簡易版 JNCATS

因子分析の結果,母親に関して16項目,子どもに関して7項目が抽出された(表2-1および表2-2)。専門職者対象の質問紙調査の結果から,母親に関する18項目と子どもに関する7項目が抽出された。これらの結果を吟味して,最終的に31項目(母親に関する20項目,子どもに関する11項目)が簡易版項目として採択された(表3)。

簡易版得点の記述統計は表4に示したとおりである。平均総合得点は24.89(±4.38)であった。10パーセンタイル・カットオフ得点は,12ヵ月齢以下では16点,13ヵ月齢以上では22点であった。

(2) 簡易版 JNCATS の信頼性

簡易版得点と原版得点の相関係数は表 5 に示したとおりであり、有意な相関関係が認められた ( $p < .001$ )。また、KR-20 に関しては、母親得点で.75、子ども得点で.78、総合得点で.82 と十分な値が見出された。これらの結果は簡易版の信頼性を示唆するものである。

(3) 簡易版 JNCATS の妥当性

簡易版得点と発達アセスメント結果に関して、有意な相関関係が認められた。母親得点において  $r = -.13$  ( $N = 365$ ,  $p < .05$ )、総合得点において  $r = -.12$  ( $N = 365$ ,  $p < .05$ ) であり、発達促進群の母子の方が母親得点も総合得点も高い傾向にあることが示された。しかし、これらの  $r$  の値は十分ではなく、簡易版の併存的妥当性を示唆する根拠としては不十分である。

子どもの発達における非促進群（陽性群）には 55 組が該当し、母親教育年数における陽性群には 89 組が該当した。簡易版の敏感度と特異度に関して表 6 に示した。特異度が高いのに比較して（子どもの発達に関して.94、母親の教育年数に関して.94）、敏感度は極めて低い結果となった（子どもの発達に関して.11、母親の教育年数に関して.06）。これでは、スクリーニング用具としての簡易版の妥当性の根拠として十分とは言えない。

表2-1 母親に関する項目の因子分析結果(プロマックス回転)

	因子1	因子2	因子3	因子4
<b>因子1: 肯定的フィードバック</b>				
言語的賞賛	<b>.97</b>	.01	-.05	-.05
賞賛	<b>.83</b>	.00	.03	-.05
非言語的賞賛	<b>.77</b>	.02	-.03	.10
ティーチング・ループ	<b>.48</b>	-.03	.17	.02
<b>因子2: 否定的対応の非使用</b>				
否定的言語の非使用(1)	-.04	<b>.82</b>	.03	.02
否定的非言語的対応の非使用	-.02	<b>.81</b>	.03	-.09
否定的言語の非使用(2)	.00	<b>.64</b>	-.01	.10
否定的言語の非使用(3)	.06	<b>.63</b>	-.04	-.03
<b>因子3: 反応性</b>				
言語性(1)	.01	-.05	<b>.90</b>	.01
言語性(2)	-.02	-.05	<b>.81</b>	-.04
肯定的非言語性(1)	.10	.12	<b>.65</b>	.03
<b>因子4: なだめ行動</b>				
非言語的なだめ行動	.03	.00	-.06	<b>.65</b>
言語的なだめ行動	.01	-.05	-.01	<b>.55</b>
位置調整	.00	-.07	.06	<b>.54</b>
肯定的言語性	-.07	.09	.21	<b>.47</b>
肯定的非言語性(2)	.04	.06	-.18	<b>.45</b>
因子間相関				
1	1	2	3	4
2	—	1	.21	.02
3	—	—	1	.07
4	—	—	—	1

注)ティーチング・ループとは、遊びを通じて教える場面を円滑に展開させる4つの要素(注意の喚起、指示、遊びの実行、フィードバック)を指す。

注)本来ならば項目番号を記すべきだが、本尺度の使用にはライセンス認定を要するので、無許可での転用防止のためここでの記載は控えた(以下、同様)。

表2-2 子どもに関する項目の因子分析結果(プロマックス回転)

	因子1	因子2
<b>因子1: 言語性</b>		
言語性(1)	<b>.98</b>	-.02
言語性(2)	<b>.92</b>	.02
言語性(3)	<b>.83</b>	.02
<b>因子2: 積極性</b>		
微笑み(1)	-.03	<b>.90</b>
微笑み(2)	-.01	<b>.90</b>
注意(1)	.04	<b>.67</b>
注意(2)	.03	<b>.63</b>
因子間相関		
1	1	2
2	—	1

表3 簡易版JNCATS

母親項目(20項目)	子ども項目(11項目)
位置調整(1)(2)	言語性(1)(2)(3)
言語性(1)(2)	注意(1)(2)(3)(4)
言語的賞賛	なだめ行動
言語的なだめ行動	非言語性
肯定的言語性	微笑(1)(2)
肯定的非言語性(1)(2)	
賞賛	
注意(1)(2)(3)	
中断	
ティーチング・ループ(1)(2)(3)(4)	
非言語的賞賛	
非言語的なだめ行動	

表4 簡易版JNCATSの記述統計(N = 397)

	平均値 (SD)	範囲	10パーセンタイル	
			1-12m	13-36m
総合得点	24.89 (4.38)	9 - 31	16	22
母親得点	16.67 (2.83)	4 - 20	12	14
子ども得点	8.22 (2.40)	1 - 11	4	6

表5 簡易版得点と原版得点の相関係数(N = 397)

	総合得点	原版	
		母親得点	子ども得点
簡易版 総合得点	.94 ***	.79 ***	.68 ***
母親得点	.82 ***	.89 ***	.31 ***
子ども得点	.75 ***	.40 ***	.88 ***

\*\*\*  $p < .001$

表6 簡易版JNCATSの敏感度と特異度

	簡易版得点におけるリスク判定		
	陽性群	陰性群	合計
<b>子どもの発達におけるリスク判定</b>			
非促進群 (DQ < 100)	6	49	55
促進群 (DQ ≥ 100)	19	290	309
合計	25	339	364
敏感度 = .11			
特異度 = .94			
<b>母親の教育年数におけるリスク判定</b>			
陽性群 (<= 12年)	5	84	89
陰性群 (> 12年)	17	248	265
合計	22	332	354
敏感度 = .06			
特異度 = .94			

(4) 簡易版 JNCATS の臨床的有用性

本研究では簡易版の尺度としての信頼性は示唆されたものの、併存的妥当性およびスクリーニング用具としての妥当性を保証する十分な根拠は得られなかった。これは、臨

床場面での簡易版の有用性に疑問を投じるものである。

本簡易版の開発は成功とは言えないが、これは本研究の手続き上の不備を示唆するものでも、原版である NCATS や JNCATS の評価を損なうものでもない。元来、NCATS は科学的行動観察に基づくユニークなアセスメント尺度であり、その簡易版開発に困難が伴うことは予測に難くない。本研究の結果は、簡易版ではなく原版 JNCATS の使用の必要性を示唆するものと捉えられる。

今後の JNCATS の臨床場面での普及促進のためには、訓練体制やコンサルテーション体制の整備といった、JNCATS ユーザー支援ネットワークの整備が必要不可欠と考えられる。これらの試みは、文部科学省科学研究費補助金(平成 20-22 年度基盤研究(C)、研究課題：親子相互作用アセスメント尺度 JNCATS に基づく研究・実践支援ネットワークの構築、研究代表者：寺本妙子)の助成を受け、展開していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

- ①河村 秋, 寺本妙子, 大森貴秀, 廣瀬たい子, 丸 光恵, 岡光 基子. 日本語版 NCATS 簡易版作成の試み: 乳幼児健診現場における親子の関係性の理解のために. 乳幼児医学・心理学研究 (印刷中).
- ②Teramoto T., Kawamura A., Hirose T., and Barnard KE. A study of the development and a test of reliability and validity of a short form of the Japanese NCATS (JNCATS). (in preparation).

[学会発表] (計 2 件)

- ①河村 秋, 寺本妙子, 廣瀬たい子, 丸 光恵, 大森貴秀. 日本語版 NCATS の簡易版作成へ向けての予備的研究. 第 17 回日本乳幼児医学・心理学会, 2007.
- ②Teramoto, T., Hirose, T., Kusanagi, M., et al. Development of Japanese version of NCATS (Nursing Child Assessment Teaching Scale). The 11th World Congress of the World Association for Infant Mental Health, 2008.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

寺本 妙子 (TERAMOTO TAEKO)  
東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・特任助教  
研究者番号：20422488

### (2) 研究分担者

廣瀬 たい子 (HIROSE TAIKO)

東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・教授  
研究者番号：101565713

岡光 基子 (OKAMITSU MOTOKO)

東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・助教  
研究者番号：20285448

### (3) 連携研究者

河村 秋 (KAWAMURA AKI)

東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・大学院生 (後期博士課程)

注 1) この試作簡易版に関する予備研究は河村 秋が平成 19 年度に東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科において修士論文として提出したものである。

## 引用文献

- 1) Kelly JF, Barnard KE. Assessment of parent-child interaction: Implications for early intervention. Shonkoff JP, Meisels SJ, eds. Handbook of early childhood intervention. Yew York: Cambridge University Press, 2000: 258-289.
- 2) Sumner G, Spietz A. NCAST: Caregiver/parent-child interaction teaching manual. Seattle: NCAST Publications, 1994.
- 3) Letourneau N, Drummond J, Fleming D, et al. Supporting parents: Can intervention improve parent-child relationships? Journal of Family Nursing 2001; 7(2): 159-187.
- 4) 廣瀬たい子. 文部科学省科学研究費補助金(平成 17-20 年度基盤研究(A)) 研究成果報告書. (準備中)
- 5) 廣瀬たい子 (監修). 養育者/親子とも相互作用: ティーチングマニュアル (日本語版). 東京: NCAST 研究会, 2006.
- 6) 三宅和夫 (監修). KIDS (キッズ) 乳幼児発達スケール. 東京: 発達科学研究教育センター, 1991.
- 7) 新版 K 式発達検査. 京都: 京都国際社会福祉センター.
- 8) 遠城寺宗徳. 遠城寺式乳幼児分析的発達検査法. 東京: 慶應義塾大学出版会, 2004.
- 9) 津守真, 稲毛敦子. 増補版乳幼児精神発達診断法 0 才~3 才まで. 東京: 大日本図書, 1995.
- 10) 柳川 洋・坂田清美 (編). 疫学マニュアル (改訂 6 版). 東京: 南山堂, 2006.